

# NHKドラマ「坂の上の雲」と「つくる会」の教科書

歴史教育者協議会 山田 麗子

## 一 好視聴率を記録したNHKドラマ「坂の上の雲」

昨年11月から、NHKは5回にわたりドラマ「坂の上の雲」第一部を放映した。今後全13回を3年がかりで放映する予定だ。原作者、司馬遼太郎本人が「戦争賛美になる」という理由で映像化を許可しなかった作品を、NHKはなぜ巨大な費用をつぎ込んで製作にふみきつたのだろうか。なぜ、韓国併合100年という歴史の節目の年に当って放映するのだろうか。昨年放映の5回を観たが、ドラマの基底をなす明治時代像や東アジア観は、「つくる会」の教科書と大いに共通点があった。来年の中学校教科書採択に際しても、少なからず影響があると危機感を持った。

ドラマの主人公は日清、日露戦争の軍人、秋山真之、好古の兄弟と正岡子規だ。貧しい青年たちのサクセスストーリーと、小国日本が戦争に勝って坂を登っていく道を重ね合わせて描いている。ドラマを貫いているのは、明治という時代への信頼だ。プロローグでは、「坂の上

流れる雲を見つめ前だけを見て歩いた明治の人々」を讃える。エピソードでは「時の日本人は、知恵と勇氣と幸運をすかさず掴む外交能力の限りを尽くして、日露戦争という大仕事にこぎつけた。」と、日露戦争を賛美し、今年放映予定の第二部の宣伝をしていた。

視聴率は関東地方のリサーチで最高19・6%（第2回）、最低12・9%（第5回）だった。主演の本木雅弘、阿部寛、香川照之、ナレーションの渡辺謙をはじめとする豪華俳優陣も好視聴率の原因だろう。9条を護る発言をしている俳優、西田敏行や米倉斉加年も出演していた。

印象に残ったのは、伊藤博文を加藤剛が演じていたことだ。ドラマでは、伊藤博文は国民思いの慎重な平和主義者として描かれている。軍備拡張を主張する井上薫、陸奥宗光に対して「バカなことを言うな。国民は重税にあえいでいる。」ロシアとの戦いに備えようとする二人に対して「お前ら正気か。武器を背景にした外交は外交ではない」と叫ぶ場面もある。国際情勢を考え悩みぬいた末に、国民のために戦争やむなしの決意をする伊藤の心情に、視聴者が感情移入しやすい演出となっている。それを「大岡越前」

の清廉潔白な加藤剛のイメージが助けられていると感じた。「つくる会」の歴史教科書が伊藤博文を読める特集ページを設けているが、その記述に重なるような伊藤博文像だ。

## 二 ドラマと「つくる会」が描く祖国防衛としての戦争

ドラマでは「日清戦争とは何か」とテ



NHKのホームページでは巡洋艦「浪速」と「筑紫」の戦闘シーンを宣伝している

ロップを出して講釈をしている。「戦争の原因は、朝鮮半島の地理的存在である。」「日本は清・ロシアが朝鮮半島を支配するのを恐れた。そうなれば、清・ロシアなど他の帝国主義諸国と日本が隣接することになるからだ」と解説する。やらなければ、日本がいずれやられてしまう、明治の戦争には正当防衛的な意味が大きかったのだとする論調は、「つくる会」の教科書と同じである。

「つくる会」の教科書も、日清戦争の前に特集「朝鮮半島と日本」を組み、ドラマと同じ説を書いていく。「清以上におそろしい大国は、不凍港を求めて東アジアに目を向け始めたロシアだった。ロシアは1891年（明治24年）にシベリア鉄道の建設に着手し、その脅威はひたひたと迫ってきた。朝鮮半島が、東方に領土を拡大しつつあるロシアの支配下に入れば、日本を攻撃する格好の基地となり、島国の日本は、自国の防衛が困難になると考えられた。」（自由社P163）

ドラマも「つくる会」の教科書も、なぜ日清戦争を書く前に、こうした講釈をいれたのだろうか。戦争の経過を丹念に見ていけば大義のない戦争であることが明白になってしまったため、「正当防衛」

という弁解を強調せざるを得ないように思える。実際の日清戦争はどのようなように始まったのだろうか。

1894年1月、朝鮮で東学農民革命が始まった。これを鎮圧するために朝鮮政府に依頼されて清国が出兵、居留民保護を名目に日本も出兵した。しかし6月、日清の派兵を民族的危機と見た東学農民軍と朝鮮政府が和議を結び、農民の闘争は収まったため、両国とも派兵の名分を失った。朝鮮政府は日清両軍の撤退を要求。清は撤退に応じることにしたものの、日本は日清両国で朝鮮の内政に干渉する提案をするなど、策を弄して撤兵を拒み戦争に持ち込んだ。日清戦争の宣戦布告は8月1日であるが、それより前7月23日に日本が朝鮮の王宮を攻撃して占領し国王を虜にした事実は、この戦争の本質を示している。「朝鮮の独立」を名分にしながら、武力で親日政権を作り、ソウル（現）を中心とする物流を押さえて、清との戦争を有利に運んだ。

東学農民革命軍は、秋に斥倭を掲げて再び蜂起したが、日本軍は近代兵器を用いて徹底的な殺戮を行った。全州一帯で自治を行った東学農民革命は、朝鮮歴史上面的なきとどった。社会改革を

掲げて立ち上がった農民軍と朝鮮政府が和議を結び歩み出したとたんに、日本軍は朝鮮の改革の可能性を、武力で奪い去ったのである。

ドラマ「坂の上の雲」では、東学農民革命を「東学党の乱」という用語を用いて、「大規模な農民反乱がおきた。」という一言で終わらせている。「つくる会」の教科書は「申午農民戦争とよばれる暴動がおこった。」と記述。（自由社P164）「乱」「反乱」「暴動」という語には社会の安定を暴力で乱すという否定的な意味がある。これらの言葉からもドラマと「つくる会」教科書の歴史観が見える。

ドラマには日清戦争で命や財産を奪われた東アジア民衆への配慮はないのだろうか。東京書籍97年版中学歴史教科書には旅順虐殺に関する挿絵が載った。「都市に攻め入る日本軍」とタイトルをつけ、「市街戦では兵士だけでなく一般市民も犠牲になった。」（P214）と説明している。旅順虐殺は11月21日、日本軍が中国の海運・軍事の重要都市であった旅順を攻略した直後に起こった。それまでの戦闘の報復感情にかられた日本側が、戦闘放棄した兵士と一般市民を対象に虐殺

を行った。虐殺された人数は中国の研究では1万8千人、日本の研究では二千人から六千人とばらつきがあるが、大変な数であることに変わりはない。「住民への大虐殺」と欧米でも報道されて、国際問題となった。

ドラマ「坂の上の雲」には旅順虐殺は出てこない。しかし、旅順陥落の3日前、主人公の一人秋山好古率いる騎兵大隊が清国の大軍と遭遇する場面が出てくる。この戦闘で日本側に犠牲が出て、その恨みが旅順虐殺につながったともいわれているが、ドラマでは大軍に遭遇して酒を、あおりながら奇天烈にふるまう好古を、「穏やかな青年が自己教育でここまで豪放に成長した」と称え、清国軍の士気の低さを強調するだけだった。

ドラマには、戦争による中国住民の犠牲をおわせる場面も出てきた。記者として従軍した正岡子規が柳樹屯で中国民衆の冷たい視線に戸惑う場面である。略奪する日本兵に中国の老人が言う。「もこの村にはなにもない。あんたらがすべて持って行った」「この子の親はおまえらに殺された。いつかきつとこの子が親の敵を討つ。」

この事実を書こうとして日本の軍人と

争いになる子規。その子規に森林太郎が語る。「維新と文明開化の輸出は朝鮮にも向けられる。彼らにしたら迷惑なことだろう。」戦争と東アジア民衆の苦悩との関係をどう描くのかと見ていたら、「帝国主義の時代であった。列強はキバから血を滴らせている食肉獣であった。」と、唐突にまとめて終わってしまった。

結局ドラマは、東アジア民衆の苦しみも、部下を失い自信をなくす秋山真之の悩みも「帝国主義の時代だった。どの国も自国の利己的利益のみで動いていた。戦争は当たり前のことだった。」という論をかぶせて、戦争を正当化していく。

19世紀が帝国主義の時代であったことは、ドラマが声だかに叫ばなくても明らかなことだ。大切なのは、今を生きる私たちが歴史をどう見て、何を学び、どう生かしていくかではないか。他国を蹂躪して多数の日本人も命を落とした過去の戦争を、帝国主義の時代だからとして美化するドラマを、今日の公共放送が宣伝する。そのことは、現在において、国際紛争の解決のためには外交や話し合いなどの平和的手段でなく、武力による解決も辞さないと言う考えに組み直すことではないだろうか。実際に、過去の戦争を

賛美し、国のために身を尽くすことを良しとする、「つくる会」の教科書は採択率を上げて子どもたちを侵食しようとしている。

### 三 「つくる会」の教科書 がねらいとしている 戦争ができる国

NHKは、昨年「坂の上の雲」放映を挟んで2回、アーカイブス「司馬遼太郎雑談『昭和への道』誰が魔法をかけたか」（1986年）を放映した。司馬のペンネームが「司馬遼に遼か及ばず」からきていることは有名だ。司馬は番組で中国、朝鮮に対する好意を語り、自分が体験した昭和の戦争の酷さを憤る。彼は日本はなんでこんなくだらぬ戦争をしてきたのだろうと考え続けた。司馬が行きついたのは、明治の人たちは頑張り、明治憲法も悪くはなかったが、日露戦争後に統帥権の運用を間違って軍部の独裁を許したために、破滅に向かっていたという。「栄光の明治」「暗黒の昭和」二元論だ。歴史を連続したものと捉えない司馬の二元論は理解が不可能だが、結局、司馬は読者に心地よい「栄光の明治」を描いて

ベストセラーを生みだす一方で「昭和の暗黒」は小説にしなかった。

つくる会の藤岡信勝は、明治の戦争を美しく描いてくれた「坂の上の雲」を評価し、テレビドラマにも期待を寄せていた。（『歴史通』2009年10月号）しかし、司馬の二元論は藤岡史観とは異なるようだ。「つくる会」の教科書では昭和の戦争も「暗黒」ではないのだから。

「つくる会」の教科書は、戦前教育に回帰しようとする教科書である。戦前教育は「天照大神」、「神武天皇」「日本武尊」「神功皇后」「仁徳天皇」などの神話を、子どもに繰り返し注入し、現身神である天皇に対する忠が民衆にとつて何よりも大切な価値とした。国家や支配層の政策を誤りのないものとし、戦争を一貫して賛美する教育であった。このような歴史学と無縁のイデオロギー注入の繰り返しによって、国民は主体的で科学的な思考を奪われた。

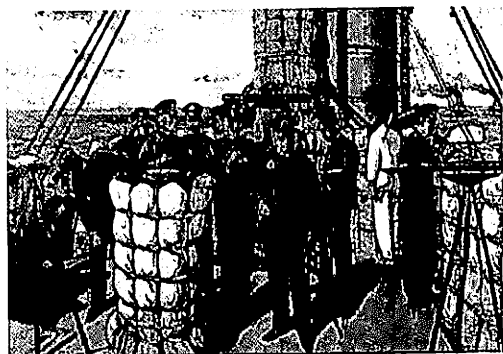
「つくる会」の教科書は、さすがに神話から始まってはいない。しかし、「神武天皇と東征伝承」「日本の神話」（自由社P31、44、45）に3ページを当て、伝承であっても、天皇を礼賛した物語は古代の人が国家や天皇についてもっていた

思想を知るうえで大切な手がかりになる、としている。どんな目的で誰が「古事記」「日本書紀」の編纂を必要としたのか、資料を客観的に検討する姿勢は見えず、古代の人みんなに自然発生的に、すぐれた指導者天皇への尊敬が生まれていたかのように描いている。昭和天皇の特集も自由社版では2ページに拡大した。生徒たちに天皇への尊敬の念を刷り込みたい意図が透けて見える。

戦前の国史教科書では、天皇が政治の中心となる明治維新を特筆すべきこととして描いたが、つくる会の教科書も明治維新を、武士の自己犠牲の上に行われた改革であると高く評価している。中国、朝鮮はそのような改革ができなかったと見下すように書き、以後、アジア蔑視の記述を重ねている。

日清戦争に際しては、前述のように朝鮮半島が清やロシアの支配下に入れば、日本の安全は確保できないという祖国防衛論をしく。「日清戦争は装備+訓練+規律+国民意識の差で日本が勝利」という記述もある。三国干渉の記述にはくやしさが滲んでおり、日露開戦と戦争の勝利は壮大な物語の様に展開されている。

「日本海海戦」の特集は「バルチック



「つくる会」の教科書は戦前の国史教科書に掲載された絵を載せている。戦艦三笠の東郷平八郎（中央）と横に立つ秋山真之。

艦隊せまる」と「日本の大勝利」の見出しをつけ、「世界の海戦史上、これほど完全な勝利を収めた例はなかった」と讚えている。（自由社P171）「戦争ってカッコいいね」「ワクワクするね」と子どもたちを誘うような戦争読み物になっている。戦争の犠牲や当時の反戦の言論については書かれない。この特集には、「坂の上の雲」の東郷平八郎と秋山真之が登場する

今年放映予定の「坂の上の雲」第二部では、この日露戦争のシーンも描かれるのだろうか。昨年、ドラマの終盤ではロシア脅威論が広瀬武夫の口から語られて

いた。「ウラジオストックの意味を知っているか。東を征服しろと言う意味だ。ロシアは中国、朝鮮、日本を狙っている。」ドラマと「つくる会」の教科書で繰り返して語られるロシア脅威論。しかし、ロシアは「満州」を確保しようとはしたが、朝鮮を植民地化しようとする意図がなかったことは、多くの歴史資料が証明している。最近の研究からは、ロシアは「南満州」を放棄しても日本との戦争を回避しようとした事実が判明している。

戦争をするために、どこかを敵国としてその脅威を国民に煽ることは、戦争を準備したい人たちの常套手段だ。現在でも、改憲や日米安保の堅持を唱える人たちは、ことさらに中国や北朝鮮の「脅威」を叫ぶ。子どもが戦争アレルギーでは、将来、改憲はできない。「つくる会」の教科書は歴史のねつ造をはかり、子どもに戦争を準備させようとしている。

#### 四 韓国併合100年の 年、東学農民革命の 地を訪ねて

「つくる会」の教科書もドラマ「坂の上の雲」も「暴動」「反乱」としか書か

ない東学農民革命。朝鮮では、その思想性と社会改革に向かった動きへの評価を込め「革命」「運動」と呼ぶ。収奪されていた農民が自らの声を上げ、政府に抗議し、改革を要求した運動として韓国の歴史で重要な意味を持つとされているのだ。指導者の全琿準は非両班であり、東学は「人すなわち天」とする平等思想のもと、寡婦の再婚や農地の均分耕作などの画期的な政策を掲げた。

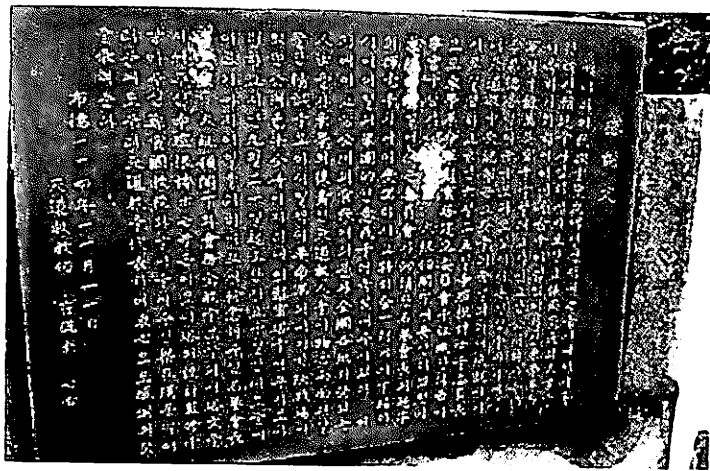
東学農民軍は、日本の干渉、支配に抗して第二次農民戦争を闘うが、その中で犠牲者は5万人に及ぶという。日清戦争での日本軍死者はおよそ2万人、中国軍死者が3万人であるが、それを上回る、朝鮮民衆の犠牲は教科書にも書かれていない。東学農民革命について研究を深め、日清戦争の中に位置づけることで、この戦争の本質が見えてくるのではないだろうか。

韓国併合100年の今年、東学農民戦争、最後の激戦地といわれる広州、牛金峠（ウグムティ）をフィールドワークする機会を得た。ここは「斥倭斥化」の旗を掲げてソウルに向かい北上した農民軍が、日本・朝鮮政府軍と激突した地だ。

地元の中学校教師、鄭善元さんが説明

して下さった。道をはさんで向こう側の山に1万人の農民軍、こちら側の山に日本軍・官軍（朝鮮政府軍）が向き合い11月9日朝9時頃、戦闘が始まった。ソウルにいた3千人の日本軍のうち8百人位がここに回されたという。お互いが数mの所まで近づいて戦う、山の中のせめぎ合いであった。農民軍の勇敢な戦いぶりが記録に残っているが、しかし、農民軍は破れた。その原因は武器の違いだった。農民軍の武器は竹やりが中心で、竹やり10に火縄銃1位の割合。日本軍は近代的なライフル銃や機関銃で猛攻撃した。後に捕えられた全琿準の裁判記録では、1万人いた農民軍を点呼すると3千人になっており、再度攻撃した後また点呼すると5百人になっていたという。亡くなった人があまりに多く、以後数年間はあちこちに死体が残っていたという地域の人の話もある。

鄭さんは東学農民革命の意義についても語った。東学農民革命は、清・ロシア・日本との関係の中で民衆の生活をどう良くしていくかをめざす闘いとなった。日本の意図は、慶福宮を抑え、官軍と一緒に民衆をたたく、韓国を植民地化するための戦争であった。ロシアとの



ウグムティの東学農民記念塔の碑文。1973年朴正熙によって建てられた。碑文は正しく歴史を伝えていないとする地域の人たちによって、「朴正熙」などの文字が削られている。

関係で植民地化は10年おくれたが。日本軍は東学農民全体で5万人を殺したという。その意味で、この地での戦いは反帝国主義をめざす運動の始まりだ。当時の人口の3分の1が、重要都市の半分が東学農民革命に加わった。

東学農民軍対して、大本営から「ごとく殺戮すべし」という命令が朝鮮各地に打電された。朝鮮政府はこの皆殺し

命令を拒否したが、日本軍が各地で命令

を実行したことは、陣中日誌で確かめられる。大本営はさらに東学農民軍を殲滅するための3中隊を派遣するが、これらは伊藤博文を含む大本営で立案された。

(井上勝生「歴史地理教育2010年7月号」東学農民軍を殲滅した日本軍)

東学農民革命軍殲滅から10年後、日露戦争に勝った日本は、韓国の外交権を奪い保護国化した。そして1910年の韓国併合。他国を武力で侵略し支配していった過去は癒えない傷を残した。

これからの100年は東アジアに信頼と平和を築いていく100年でありたい。そのためには過去の歴史を学び合い、歴史認識を話し合い、未来をつくる教育の交流を進めていくことが大切だと思う。

日韓の草の根の交流は広がっている

私も10年ほど前から、日韓教師の授業実践交流に参加して多くのものを得た。

現在は「向かい合う日本と韓国・朝鮮の歴史・近現代編」の出版をめざし、日韓双方の原稿を検討するなかで理解を深めている。市民どうしが交流し、困難があっても話し合う努力が続ける。そのプロセスが平和の構築そのものではないだろうか。

か。

## 五 各地域で教科書採択に向けた運動を。

2009年の採択でつくる会系教科書採択率は扶桑社版0.6%、自由社版1.1%、合計1.7%となった。横浜市8区で自由社が採択され、05年の前回採択と比べ4倍強に増加してしまった。

来年2011年、再び中学校教科書の採択がある。現在、埼玉県14採択地区のすべてで、歴史は東京書籍版が採択されている。しかし、「坂の上の雲」の司馬史観が一定の支持を得ている風潮もあり、市民が何かをしなくてはと考えて、所沢の市民グループで学習会を行ってきた。地元選出の衆議院議員3人を招いて集会も行った。「つくる会」の教科書(育鵬社・自由社)を採択させない要望書をつくり、運動を進めている。

教科書採択地区は複数の自治体にまたがる。他の市町村の市民と協力し、平和な未来と子どもの幸せにつながる教育や教科書について話し合い、市民の力を広げていきたいと願っている。

(元所沢市内中学校教師)